



遠い空

Tomika Tacko

富岡多恵子



遠い空

富岡多恵子



遠い空

定価一〇〇〇円

昭和五十七年七月十日初版印刷
昭和五十七年七月二十日初版発行

著者 富岡多恵子

発行者 高梨 茂

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104

東京都中央区京橋二一八・七

振替 東京二・三四

©一九八二 検印廃止

目次

弱い肉	野施行	二十歳	女道楽	犬の耳	末黒野	峠のわが家	話すことはない	遠い空
175	153	129	109	93	71	51		5

装
幀
菊
地
信
義

遠
い
空

遠
い
空

二十数年前の五月三日に、東北本線のM市に近いQ駅の北東にある、日暮山と呼ばれている海拔百二、三十メートルの凸凹の激しい植林地内で六十九歳の老女が殺されていた。

杉苗植えにいった菅野ソヨさんが帰らないので、近所のひとや消防団で山をさがしたところ、日暮山で死体となっていた。死体には杉の枝と土がかけてあった。

ソヨさんは日暮山の近くの農家のひとで、わらびやぜんまいを採ってQ市の市内で売ってもあった。死体からかなり離れた場所に、採ったばかりのわらび、ぜんまいが七キロ余り入った茶色の風呂敷包みがあった。

死体となったソヨさんは木綿の縞模様のハンテンを着て白い木綿の肌着をつけていた。腕には、黒い木綿の作業用の腕カバーをはめ、紺のモンペにゴムの半長靴をはいていた。モンペの紐が解かれ、両膝の下までさげられていた。

ソヨさんの夫は五年前に病死し、長男は三年前に自殺している。次男(四十五歳)はF県に出稼にいき、三男(四十一歳)はM市で中学の教師をしている。長女(三十八歳)はQ市内に嫁い

でいる。次女（三十三歳）は十年前に一度結婚したが協議離婚してQ市内で再婚している。三女（三十一歳）はE村に嫁いでいる。したがってソヨさんと同居しているのは、長男の嫁（四十四歳）とその長女（二十一歳）、次男の長女（十六歳）、及び次女の先夫との間の男の子（八歳）である。

この中で、家族や親戚から最も疑われたのは長男の嫁と、次女と離婚した男であった。

ことに中学教師の三男は長男の嫁を疑った。嫁はソヨさんと平常から仲が悪く、経済の実権をソヨさんが握っているので不満をもっていた。しかし長男の嫁はその日、朝早くから畑に粟播きに出て昼どきに家に帰った。その時ソヨさんはいなかったが、お寺の観音講に出席すると話していたから、そこへいったと気にしなかった。ところが午後また畑へ出て七時ごろ帰ってもソヨさんがいない。近所の観音講へいったひとにたずねるとソヨさんが出席していないことがわかった。それで家のまわりをさがしたら、裏庭に補植のために植えてあった杉苗が見えないので、杉苗を植えに山へいったと判断したが、帰りが遅いので血圧の高いソヨさんが山で倒れていたら大変だと消防団に頼んだのである。

次女の先夫はソヨさんの家族や親戚から疑われても仕様のない男だった。子供をふたりとも次女が引取って離婚している。養育費を支払う約束で離婚したのに、一度も約束をはたしていない。しかも、子供のひとりが死んで、その医療費が共済組合から父親である先夫に渡ったのを使って

しまつて養育者のソヨさんが催促してもよこさなかった。養育費のことでソヨさんと何度も喧嘩していた。しかし、五月三日は午前中ずっと自宅の前の苗代で消毒作業し、午後は畑仕事のあと餅をついて、一日中家にいた。

近所のひとの噂はふた通りであつた。ひとつは、ソヨさんが小金をためてそれをいつも肌身離さずもっていたから金をとられて殺されたというのである。もうひとつは、ソヨさん所有の山林が日暮山の一部にあり、その境界線のことと隣接する多川三四郎ともめていたというのである。しかし、ソヨさんの財布も貯金通帳も家にあり、境界線も多川三四郎立合いですでに測量は済ませてあつた。

その日、日暮山に山菜を採りにいったのは次のひとたちだつた。

小学校六年生の菅原くん及川くんのふたりは、朝十時ごろわらびを採っているソヨさんに会い、「おめえらもいっぺえ採ったなあ」といわれた。

他に、高校三年の柳田さんと三人の同級生、中学教員の桑原さん、家事手伝いをしている桑原さんの妹とその友人ふたり、農家の主婦八重樫さん、それに、高校三年生の赤木、松山の両くと松山くんの母親朝乃さんであつた。

このうち、赤木、松山くんは日暮山から帰る道で、四十歳ぐらいの男に出会っていた。

赤木くんは山菜採りはじめてで、松山親子に案内してもらつて日暮山へいった。松山くんの

母親朝乃さんは先に帰ったので、ふたりで山菜を採りながら下山し、途中、のどがかわいたので湧水を見つけて水を飲んでた。その時少し離れたところから男がおりにきて蛇ぜんまいを採り、杉林の中から自転車をはき出して、それに乗って去っていった。それを見ていた松山くんは赤木くんに、「ほら見ろ、蛇ぜんまいを採るような馬鹿もいるぞ」といい、ふたりは笑った。蛇ぜんまいは食べられないので、それを採るひとはいなかった。

男が松山朝乃さんの家にはじめてきたのは二年前の夏であった。黒い、古ぼけた自転車をひいて店の中をうかがっていた。朝乃さんの家は、簡単な自転車の修繕もする、中古の自転車を扱う古物商であるが、雑貨屋と煙草屋も兼ねていた。

その時、朝乃さんの他に家にはだれもいなかった。朝乃さんは店の奥にかけだした狭い板敷に坐っていた。

男が古ぼけた自転車をひいて店の中まで入ってきたので、修繕を頼みにきたか、通りがかりに空気入れを借りにきたのだと朝乃さんは思った。「今日は、だれもいねえから、修繕はできねえすよ」と朝乃さんはいったが、男は自転車を倒し、ポケットから千円札を出して振りながら奥へ入ってくる。男は背丈があり、がっちりした体格で、角ばった大きな顔は陽にやけ、髪は伸びてバサバサしている。ねずみ色のシャツにねずみ色の膝の出たふといズボンをはいていた。

千円札を振っているが、煙草ともちり紙ともマッチともいわぬから朝乃さんは男が何を買いにきたのかわからなかった。

ところが、男が中古の自転車を押しのけてすぐそばへきた時、言葉を聴くことも発することもできぬひとなのを朝乃さんは知った。

男は、家の中に朝乃さんひとりしかいないのをたしかめるように奥をのぞいて、千円札を朝乃さんに見せ、その千円札をまたポケットにねじこんでから、ズボンをおろす手振りをする。朝乃さんは男が便所をかしてほしいと訴えているのだと思った。ところが男は、自分の性器を握る振りをする。男は何度も何度も朝乃さんに同じ手振り身振りを繰返す。朝乃さんは、男が自分に性交を求めているのがわかった。ただ性交だけを求めているのがよくわかった。なまじ言葉による粉飾がないから、男の求めるものの強さだけがはっきりと見えた。

店へ入ってきた時は、うす汚れた四十歳ぐらいの男に見えたが、そばで見るとまだかなり若いように思える。三十になるかならぬかの年頃に見える。男は、息をはずませて、ズボンをおろす仕草をまだつづけている。その日は朝乃さんの目をじっと見すえたままだ。発情した若いオスが、声をあげることもできないでそこにいるように朝乃さんには思えた。

朝乃さんには息子が三人いた。長男は二十七歳で東京へ出ている。次男が二十四歳で農業のかたわら自転車の修繕をしている。三男は高校一年生である。朝乃さんは、男が長男と同じくらい

の年齢に思えた。朝乃さんの夫は二年前に病死した。男に会った時朝乃さんは五十五歳だった。

朝乃さんは、店から奥の住居の方へ通じる狭い土間の通り廊下を、男の手をつかんですすんだ。男を台所へ押しこめるように先に入れ、重い戸を閉めた。台所の隅には、使われなくなった黒いカマドがあった。天井に、明り通りの小さな窓があった。男は、両手をだらりと下げて、落着かぬ目をしてつつ立っていた。朝乃さんは、子供を抱くようにその男の肩と胴体に手をかけた。男はズボンをおろした。陰毛の中から充血した男の性器が突出し、放っておくと次の瞬間にはさらにせり上ってくるかに、朝乃さんには見えた。朝乃さんは、スカートをまくりあげた。朝乃さんは、その見知らぬ、口をきかぬ男との性交のあとさきは考えなかった。その時の気分は、単純に、男がかわいそうに思えただけだった。

男はその時二十六歳で、姉がふたり、弟、妹がそれぞれひとりいた。ところが、この五人の兄弟姉妹のうち末の妹をのぞいて、四人とも音を聴くことも、言葉を発することもできなかった。男は、幼い時から友だちと遊んだことはなく、また学校へいったこともなかった。ふたりの姉も弟も同様で、みんなは結婚せぬまま父母の農作業を手助けしていた。家の中では父母と妹の三人が時折は喋り、あとの四人は別々に黙って生きていた。

男の兄弟姉妹は、きわめて濃い血縁結婚から生れていた。父親と母親はイトコ同士であった。しかも、父親の父親と、母親の父親もイトコ同士であった。さらに、その両者のそれぞれの父母

は、二組の兄妹が入れちがうように結婚して二組の夫婦になっていたのだった。

朝乃さんは、男がどこの者かは勿論、名前もなにも知らなかった。ただ漠然と、男が強く性交だけを求めるのを見て、かわいそうに思えた。嫁コがこねえんだな、と朝乃さんは思った。最初きた日から、一日おいて男はまた同じように自転車をひいて店に入ってきた。その次の日もきた。二度目からは、もう千円札を振らなかった。しかし、最初と同じように、性交を求める身振りをした。二度目も三度目も、最初と同様、奥の台所で朝乃さんは男の欲望をしずめた。朝乃さんは、男の顔を見なかった。男が言葉を発しないのが、朝乃さんに落着きを与えた。もし男が、おばさん頼むからやらせてくれとでもいったら、朝乃さんはその言葉によって動転したにちがいがなかった。二度目の時、朝乃さんは立ったままブラウスのボタンをはずして、男の頭部を嬰兒を抱きしめるように両腕でくるみ、男の後頭部を撫でた。男は膝を少しかがめて、朝乃さんに頭を撫でられてしばらくじっとしていた。その後、男は、秋までこなかった。

男は、十か十一ぐらいの時、上の姉が強姦されているところを見たことがあった。夕方五時ごろには暗くなってしまふ冬至のころだった。その年珍らしくまだ雪はほとんどなかった。納屋の裏からつづいたブナの林の中だった。姉はズボンをはき、セーターを着て、その上から綿入れのハンテンを着ていた。姉は、いつも表から帰らず、裏のその道を通っていた。五十歳ぐらいのふたりの男が姉のうしろからきて、薄茶色の固い落葉の上に、姉を突き倒した。男のひとりが、倒

れた姉の肩を両手でおさえていた。もうひとりの男が姉のズボンと下着をひきずりおろし、それから自分のズボンをずりおろした。姉の両手両足が、胴体をつかまえられた昆虫のように上下に動いていた。姉の下半身を、男はその時はじめて見た。というより、女の下半身をはじめて見たのだった。肩をおさえている男がなにか叫んでいた。ズボンをおろした男が、姉の足を片方ずつもち、大根を折るように膝を折ってから開いた。姉の足はふたつの三角をつくって倒れた。勿論、姉は声をあげられない。またよし姉が声をあげても弟である男には聴えない。そしてまた姉の叫びを聴いても、男が声をあげることはない。男は姉を助けず、すこし離れた樹木のかげから一刻一刻うす暗がりになっていく中で姉の下半身を見ていた。

男が九月の終り近くに朝乃さんの家へきた時、ちょうど朝乃さんは日暮山へきのこ採りに出かけるところだった。朝乃さんはきのこを売るために採るのでなく、そのあたりのひとがたいていするように、自分の家で食べるのに採りにいく。日暮山ではシメジ、ハツタケ、アミノメ、それにクリボタシ、カヌカも採れる。それらのきのこを、都会の人間には想像できぬくらいに、さまざまなやり方で料理して食べる。めしに炊きこみ、寄せ鍋風に炊き食いし、あえものにもし、汁にもいれ、他の野菜との炊き合せにもする。採りたてなので、どのきのこも菌ごたえがあつて、それぞれに独特の味と香りがする。

朝乃さんの家の裏側から日暮山へ入る道がある。朝乃さんは深い籠をもち、そのうしろから、